



紙本着色職人尽絵（喜多院蔵）

国指定重要文化財。六曲一双屏風仕立て。縦57.8cm、横43.6cmの中に職人の風俗が描かれ、各曲に2図ずつ貼り込まれている。（現在は押絵貼りだが、もとは画帖であった）計24図のこの職人尽絵は、25の職種のかつての様子を知ろうえで、また美術的にもたいへん貴重な資料である。

作画期は不明であるが、慶長頃または寛永頃の近世初期ではないかとされる。捺印（壺形の印章）があることで、作者は狩野吉信だとわかる。狩野永徳の三男で、通称を源三郎、号を昌庵と称した。遺作は希少である。

描かれているのは、桃山時代の京都あたりの職人風俗ではないかといわれるが、その生活を映し出して興味深い。

鋳師・刀師等の武家関係、糸師等の染色関係や、細工関係、調度関係、工芸関係、仏教関係、軽細工関係の職種である。

本頁に掲載の図には、桶師と畳師の姿が描かれている。他の23図は、各図に一つの職業が描かれているので、この図の職業二つで計25職となる。畳師は畳のへりをつけている。一人の桶師は桶のたがをはめていて、もう一人は青竹を薄く割っているようだ。桜の花が美しく咲き、軒には小絵馬や鼓がつるしてある。

職人絵は、様々な職業の細かな道具や動きのある仕事風景を伝えて、他の歴史資料とは一味違う面白みを持って語りかけてくる。

川越藩腰物拝見録 ～刀剣から見た近世武家社会～

1. はじめに

「刀は武士の魂」と言われるように、江戸時代、刀は武門の家の象徴でした。それぞれの家の格式に見合った名刀をもつことは、当時の武士たちの夢であったと思います。

それでは、川越藩主やその家臣たちは、日常どのような刀を指し、どのような名刀を秘蔵していたのでしょうか。

近年、博物館では、川越藩士の家に伝来した刀剣を一括して御寄贈・御寄託いただく機会がありました。また、館蔵資料の中には、藩主である松平大和守家の蔵刀を書き上げた『御腰物御元帳』があります。

本稿では、博物館が収蔵するこれらの刀剣や文書を通して、川越藩主・藩士所蔵の刀剣を拝見したいと思います。

2. 松平周防守家臣坂田家の刀剣

坂田家は、松平周防守家の家臣です。明治元年（1868）の『分限帳』によれば、石高は切米8石2人扶持、役職は水防方兼算吏となっています。

坂田家に伝来した刀剣は8振で（表1）、このうち5振が御子孫の方の御厚志により博物館に寄贈されています。

坂田家の刀剣には、身幅が広く重ね厚い、刃長1尺7、8寸ほどの刀が5振もありました。このように寸が短く重量のある刀は、背が低く骨太でがっちりした、当時の坂田家の御当主の体格に合わせて選ばれたものと考えられます。

次にこれらの刀剣の時代と刀工について見てみましょう。

室町時代の刀剣には、美濃国兼宗の短刀（2）と備前国祐定の刀（1）があります。これらは研ぎ減りが著しく、まさに戦乱の世を駆け抜けて来た刀といった感じがします。

江戸時代の刀剣には、越前家と江戸家の康継の刀（3・

4）がありました。越前家の康継は、刃長1尺7寸、身幅広く、反り浅く、中切先が大きく伸び、非常に力強い姿です。刃文は、小板目の詰んだ地金にゆったりとうねる豪快な湾れ刃を焼きます。また、この刀に添う赤木柄の拵には、越前国の金工、記内による二葉葵図の鐺を掛けています。康継は、将軍家から許されて中心に葵紋を切ったことから「御紋康継」とも呼ばれ、この時代、非常に人気の高かった刀工です。この刀は出来がよく、拵も越前記内の鐺で揃えていることから、これを手に入れた坂田家の御先祖は、得意満面だったに違いありません。保存状態も良好で、秘蔵の一刀として大切に伝えられてきたものと思われます。

3. 松平周防守家臣太田家の刀剣

太田家は、松平周防守家において年寄の要職を勤めました。明治元年の『分限帳』では、太田家の石高は420石となっています。家譜によれば、太田家の遠祖、太田主膳重記は松平周防守家2代康重公に召し抱えられ、関ヶ原の戦いや大坂の陣に参戦したと伝えられ、太田家が周防守家に古くから仕え、股肱の臣として重く用いられていたことがわかります。

太田家に伝来した刀剣は10振で（表2）、そのすべてを博物館に御寄託いただいています。

弘利銘の太刀（2）は、国別・時代が不明ながら「川向」の号をもち、松平康重公より拝領したとの伝来をもちます。吉房銘の太刀（1）は、刃長2尺8寸、細身で腰反り高く、猪首切先、優美な中にも力強さがあります。地金は小板目で乱れ映りが淡く立ち、刃文は華やかな重花丁子を焼きます。この太刀は、鎌倉時代に活躍した備前国福岡一文字派

表1 坂田家旧蔵刀剣一覧

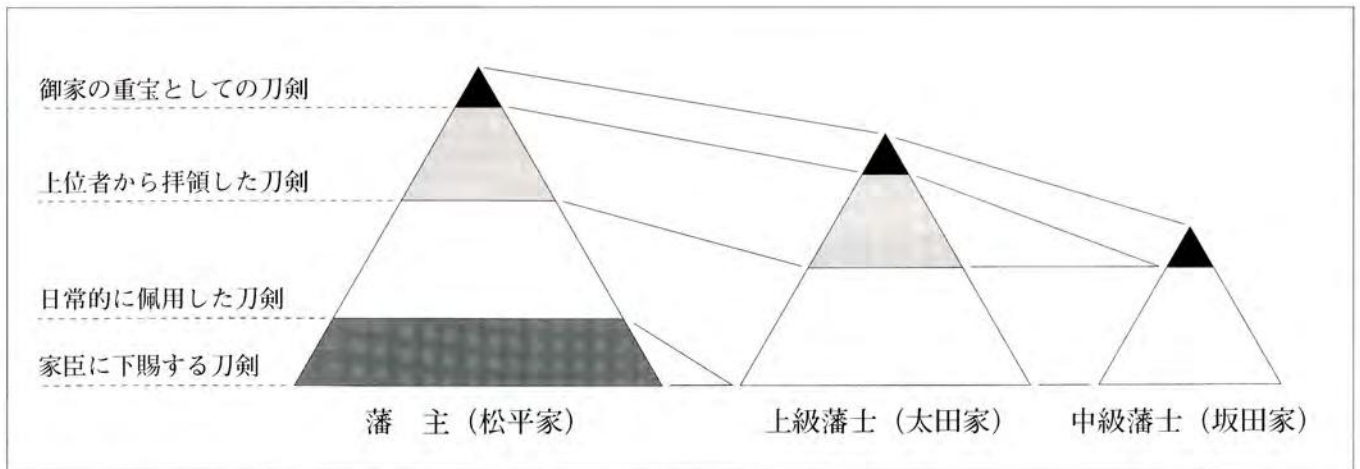
番号	種別	銘	国別	時代	備考
1	脇指	備前国住長松祐定	備前	室町	
2	脇指	兼宗	美濃	室町	
3	脇指	(葵紋) 康継南蛮鐵/於越前作之	越前	江戸	
4	脇指	(葵紋) 康継以南蛮鐵/於武州江戸作之	武蔵	江戸	
5	脇指	無銘	加賀	江戸	
6	脇指	無銘	美濃	江戸	
7	脇指	無銘	不明	不明	
8	脇指	無銘	不明	不明	

表2 太田家所蔵刀剣一覧

番号	種別	銘	国別	時代	備考
1	太刀	吉房	備前	鎌倉	
2	太刀	弘利造	不明	不明	康重公より拝領
3	短刀	無銘	不明	不明	
4	短刀	信國	山城	室町	
5	短刀	備前住長松祐定/永祿□年八月日	備前	室町	
6	脇指	無銘	備前	室町	
7	刀	賀州住兼若/元和三年二月日	加賀	江戸	
8	脇指	備中守橋康廣/(菊紋)	摂津	江戸	
9	刀	丹後守藤原直道作/(菊紋)一 延宝二年五月吉日	摂津	江戸	
10	脇指	無銘	武蔵	江戸	

表3 松平家旧蔵刀剣の一例

番号	種別	銘	国別	時代	備考
1	太刀	無銘 式部正宗	相模	鎌倉	
2	太刀	備前在銘 則宗御太刀	備前	鎌倉	
3	太刀	一文字備前 則房衛府御太刀	備前	鎌倉	
4	太刀	無銘 行光大	相模	鎌倉	
5	太刀	在銘 二字國俊 大 但一名大波	山城	鎌倉	
6	太刀	鞘巻 守次御太刀	備中	平安	御入内御使として明徳公御拝領
7	太刀	鞘巻 正恒御太刀	備前	平安	御入内御使として明徳公御拝領
8	太刀	備前磨上 重實(真) 大	備前	鎌倉	御代始御賜の節、基知公御拝領
9	刀	美作國 兼先 大	美作	江戸	将軍家定公より直族公御拝領
10	太刀	宇津國宗御太刀	越中	鎌倉	建中院御持寄御贈物
11	短刀	御右手指 長谷部國信	山城	南北朝	建中院御持寄御贈物
12	脇指	駿河國 廣助 小	駿河	室町	建中院御持寄御贈物
13	刀	阿州 泰吉 大	阿波	室町	建中院御持寄御贈物
14	刀	紀伊國重國御打刀	紀伊	江戸	建中院御持寄御贈物
15	短刀	近江大掾 忠廣 御小サ刀	肥前	江戸	建中院御持寄御贈物
16	脇指	山城守 歳長 小	山城	江戸	建中院御持寄御贈物
17	刀	備前國河内大掾藤原 正廣	肥前	江戸	徳木十郎右衛門頭藏
18	刀	在銘 雲州住長信	出雲	江戸	御留引にて三上彦市頭藏
19	刀	在銘 宗次 大	武蔵	江戸	好田茂良頭藏
20	刀	主水正清 大	薩摩	江戸	安福要人拝領
21	刀	新作 無銘 大	不明	江戸	御留引にて小出辰右衛門頭藏



第1図 川越藩内での刀剣の所有形態

の吉房の作刀で、来歴ははっきりしませんが、時代の古さ、品格の高さから拝領品の可能性が高いと思われます。また、この太刀に添う黒蠟色塗鞘打刀拵の三所物（小柄・筭・目貫）は、康定公から下賜されたものと伝えられています。

信国の短刀（4）は、本来1尺2、3寸の小脇指だったものを折り返して短刀としたものです。やや研ぎ込まれていますが、ふんわりと沸のついた耳形の乱れ刃や三鉾剣・梵字の彫刻などに、応永（1394～1427）頃の信国の特徴が表れています。永祿（1558～69）年紀の祐定（5）は、この時代流行した「鎧通し」と呼ばれるスタイルの短刀です。無反りで重ね厚く、切先の鋭い、実戦的な姿です。

江戸時代の刀剣では、加賀国の初代兼若の刀（7）や大坂・紀州石堂派の備中守康広の脇指（8）、大坂・三品派の丹後守来直道の刀（9）など、江戸初期から前期に活躍した著名工の作刀が多く所蔵されていました。

4. 川越藩主松平大和守家の刀剣

松平（越前）大和守家は、結城秀康の五男、直基を祖とします。明和4年（1767）に秋元家に代わって前橋城から入封し、慶応2年（1866）まで藩主を勤めました。入封時の石高は15万石、天保13年（1842）に加増され、17万石となりました。

大和守家が所蔵した刀剣は、現在まとまった形で残されていません。しかし、当館所蔵の『御腰物御元帳』からその様子を窺い知ることができます。

『御腰物御元帳』は、藩主が日常、手元に置いていた刀剣の台帳で、1振ごとに寸法や拵、伝来や由緒、出納の年月日などが記録されています。この冊子には、157振の刀剣に関する記載がありました。ここでは、このうちの21振について見てみましょう（表3）。

正宗の太刀（1）は、「式部正宗」として有名な1振で、8代将軍吉宗が本阿弥光忠に命じて編んだ『享保名物帳』にも掲載されています。大磨上無銘で刃長2尺2寸7分半。代付は、当初350枚でしたが、後に破格の700枚に改められました。名実ともに大和守家の蔵刀の頂点に立つ宝刀です。備前国福岡一文字派の則宗の太刀（2）や同国片山一文字派則房の太刀（3）、相模国行光の太刀（4）、山城国来国俊の太刀（5）なども、これに次ぐ重宝といえるでしょう。

古備前正恒の太刀（7）は、明和3年（1766）5月に将

軍家治の子、家基の加冠・叙任の際、御使者として宮中へ参内した朝矩公が拝領したものです。また、備前国長船派重真の太刀（8）は、宝永7年（1710）7月、基知公の入部御暇に際して、将軍家宣から拝領しました。このように、大和守家には、将軍家より拝領した刀剣が9振ありました。

藩主の日常の指料を考える上で、直侯公（建中院）が水戸家から養子に入った折持参した刀剣が、大変参考になります。この中には、越中国宇多国宗の太刀（10）や山城国長谷部国信の短刀（11）などに混じって、駿河国島田広助の脇指（12）や阿波国海部泰吉の刀（13）など室町時代の実用刀が含まれています。また、南紀重国の刀（14）や近江大掾忠広の短刀（15）など、江戸時代の刀剣が多いことも見逃せません。

このほか『御腰物御元帳』には、藩主が家臣に下賜した刀剣の記録もあります。これらは、出雲国高橋長信の刀（18）や江戸の固山宗次の刀（19）など幕末の刀剣、いわば当時の新作刀が多いようです。

5. まとめ

以上、博物館の所蔵する刀剣や文書を通して、川越藩主やその家臣たちの蔵刀について見てきました。

この中で注目されるのは、それぞれの家で、刀剣の所有形態が異なることです（第1図）。

川越17万石の太守、松平大和守家の蔵刀は、藩主が日常的に用いる指料のほか、将軍家や他家からの拝領・献上刀剣、家宝である「式部正宗」、家臣に下賜する新作刀剣などから構成されています。年寄420石の上級藩士である太田家には、日常の指料のほか、弘利の太刀、吉房の太刀など御家の重宝とも言うべき拝領刀剣があります。また、水防方兼算吏8石の中級藩士である坂田家では、御当主の日常の指料を中心に、江戸家と越前家、2振の康継刀を所蔵していました。

江戸時代、武家儀礼が整備されてゆく中で、刀は武士の表道具として、宝器や贈答の品として重要な役割を果たすようになります。それぞれの家では、石高や役職に応じた刀剣を用意しておく必要がありました。こうしたことが、これら各家の所蔵刀剣の構成に反映されているものと思われます。川越藩主・藩士の所蔵刀剣は、近世武家社会の構造を鮮やかに映し出しているのです。（学芸係 岡田 賢治）

威稜徳潤碑 と 佐々泉翁



市内久保町の本行院は、成田山新勝寺の別院で、正しくは川越別院成田山本行院というが、地元の人々からは「久保町のお不動様」と親しまれ、香火の絶えることがない。

この本行院の境内に、「威稜徳潤碑」なる碑がある。既に一带の景色に溶け込み、顧みる人も稀であるが、書は題額・銘文ともに巻 菱湖門下の四天王の一人として著名な書家萩原秋巖、撰文は川越最後の藩儒佐々泉翁、石工も有名な広瀬翠鶴と、いずれも注目すべき面々が携わった貴重な石碑である。

これらの人々の中、特に撰文に当たった佐々泉翁については、近年刊行された『川越の人物誌』にも採録されず、今日その業績は殆ど忘れ去られてしまった観がある。

大正元年、泉翁の子孫が書き上げた功績調書によれば、その略歴は以下のようである。

文化7年(1810)、最後の川越藩主松井松平家が石見浜田在城の時、同地に生まれた。初め小篠氏、通称は礼蔵また泉右衛門、名は泉翁、楽軒・白水老人などと号した。家禄百石。

初学を同藩松田某に学んだ後、京都の猪飼敬

所、江戸の朝川善庵らに漢学を学び、やがて藩主の侍講となった。慶応3年(1867)藩主の移封に従い、陸奥棚倉から川越に転じ、明治29年77歳を以て没。市内蓮馨寺に葬られた(後に市内見立寺に改葬)。著作に『詞原三叢』『経義史論雑記』などがある。祖父小篠御野・父の北岳も学問を以て松井松平家に仕えたが、特に祖父の御野は儒学を松崎観海に、国学を本居宣長に学んだ著名な学者で、藩校長善館の創設に功労があった(本居宣長『玉勝間』には御野の名が見える)。

なお、岸伝平先生の『川越藩政と文教』によれば、泉翁は主家に骸骨を乞うて許された後、私塾を営み漢学を教授したが、常に「学者我国の道を知らずして徒らに漢籍を講ずるは、是亦孔子の意に背くものなり」といって、熱心に国書を読ましめたという。出所を明らかにし得ないが、一時君臣の間に鈴屋の学問が盛んであった松井松平家の藩学最後の学者にふさわしい逸話といえよう。

(T. T生)

平成10年度 資料寄贈者芳名録

平成10年度中も、多くの方々から貴重な資料を御寄贈いただきました。心よりお礼申し上げます。

府川彌壽夫	太田 敬	野尻 正光	小田 伍良	木村 利彦	鬼頭 稔
荒牧 澄多	宗形 慧	坂田 久子	中沢 敏夫	小高 亨	坪井 義雄
平野 一郎	横田 章二	浜野 千三	菅間誠之助	高柳 亮順	丸井三代子
石井 弘	松本 好司	森田 重光	柳井 潔	戸田 知一	田島 将市
新井 勉	新井 節子	塚田 清一	渋谷 罔彦	鎌田 常雄	
埼玉県立川越女子高等学校		川越市立川越第一小学校			(敬称略・順不同)

分館だより — 本丸御殿 —

家老詰所



藩主を補佐し、実質的に川越藩の政治を執行していたのは家老でした。その家老が藩政を執行していた所が家老詰所です。

現在残っている家老詰所は、本丸御殿が造営された嘉永元年（1848）当時のものです。この建物は、廃藩

置県後の明治5年（1872）に上福岡市の星野家に払い下げられ、明治6年（1873）に移築されて母屋として使用されていました。それを、今の場所に移築復元し、平成2年（1990）3月1日川越市立博物館開館に伴い、公開しました。

家老詰所の奥の間には、袴姿の人形が3体あります。これは幕末の頃の松平大和守家の家老で、正面が筆頭家老の小河原左宮、向かって左が下川又左衛門、右が白井元長をモデルにしています。3人が、川越藩の江戸湾警備について話し合っていたであろうところを表しています。

さて、現在、本丸御殿の玄関部分とこの家老詰所は渡り廊下でつながっています。渡り廊下には屋根がついているだけで、中庭等の景色も御覧いただけるようになっています。

この度、その側面に板塀をたてることできるようにしました。これにより、横風を伴う雨などの場合でも足元を濡らさずに通ることができるようになりました。

御来館いただいた皆様に、より快適に御見学いただけるよう、今後も様々な面で改善を心掛けていきたいと思えます。



渡り廊下（板塀取り付け前・後）

常設展示室のコーナーから

「ふるさとのまつり」コーナー

おいぶくる 老袋の万作



平成12年4月23日（日）まで展示

老袋は、川越市内・北東部に位置しています。老袋の万作は、4月11日下老袋氷川神社（下老袋732）の春祭りに奉納されます。ここの万作芸は、明治25年（1892）頃、比企郡川島村（現川島町）の出丸中郷から教わったのが始まりといわれます。明治後期から大正にかけて盛んに行われましたが、娯楽が多様化するなか次第に廃れてしまいました。しかし、昭和38年（1963）地元有志により「老袋万作保存会」が結成されて復活し、以後大切に受け継がれています。

豊年万作という言葉があるように、万作は五穀豊穡を祈願して行う芸能です。万作踊りや万作芝居と通称され、手踊り、芝居、段物、茶番など豊かな内容を持つのが特色です。かつては、特別な舞台は作らずに農家の座敷で演じられたものでした。

老袋の場合、踊りと芝居の両方が行われます。踊りは下妻踊りと伊勢音頭くずれの2種類があり、四つ竹、太鼓、歌に合わせて踊ります。芝居は、段物としては「笠松峠」、「お半長右衛門」などがあり、茶番としては「お玉ヶ池」などがあります。年によって演目が異なりますが、役者からは滑稽なアドリブも飛び出し、その場が大いに盛り上がります。

県下でも万作芸が演じられている所は数少なく、埼玉県の無形民俗文化財に指定されています。

博物館と

学校をつなぐ

テレビ会議システムを使って

平成11年11月22日、博物館と川島町立伊草小学校をテレビ会議システムで結んだ授業が実施されました。

テレビ会議システムでは、ISDN回線を使用し、テレビ電話で離れた場所の映像と音声をリアルタイムで相互に送受信することができ、現在企業等では遠隔地同士を結んでの会議などに利用されています。また、学校等でもコンピュータの導入によりISDN回線が整備されるに伴い、このテレビ会議システムを授業の中で活用しようという動きが高まっています。新学習指導要領で導入される総合的な学習の時間の研究指定校等では、ふるさと自慢や生活の様子について情報交換等に活用するなどの実践事例が紹介されています。

さて、今回の伊草小学校の授業では、テレビ会議システムを使って、博物館展示室と伊草小学校6年生の教室（コンピュータールーム）を結んだわけですが、見方を変えれば学校教育施設と社会教育施設を電話回線で結び、学校教育と社会教育の関係者が一体となって子供の学習に取り組んだと見ることもできます。



博物館での様子

おかげでこの取り組みは、学校側にとっては社会科を基に総合的な学習の時間への発展的単元を創造する上で貴重な事例となり、博物館にとっても従来の博物館活用にはない新たな可能性を開く事例となりました。

授業の方は、伊草地区が旧川越藩の米どころであることから、伊草と川越のつながりについてさらに学習するといった展開で実施しました。具体的には、近世展示室で館職員が展示資料を使って、将軍が川島に桜を見に来たことやペリー来航時のことなど川島とのつながりの深い事例を紹介し、その時の映像と音声をそのまま瞬時に伊草小学校の教室へ送ります。送った情報を基に今度は子供たちから質問を返してもらい、その質問に館職員が答えるという形で授業を行いました。

館職員と伊草小学校の子供たちとのテレビ電話を通しての交流は、子供たちに地域の歴史の面白さと博物館への理解を深めたようです。



学校での様子

この授業における子供たちの感想が寄せられていますので、いくつかをここに紹介したいと思います。

ぼくは、この勉強をする前までは「川越藩」という言葉すら知らなかったのに、今は、いろいろなことがわかってよかったです。歴史の勉強が、今まで以上に深く感じられ、とても楽しかったです。まだまだやっていないことに挑んでいきたいです。ありがとうございました。(I. D)

自分の学習課題が、「川越藩には有名な人が来たのか」というものだったけれど、博物館の人の説明を聞いたり見たりしながら、今まで思いもなかったような人も来ていることがわかってびっくりしました。特に、徳川家光などの教科書にも出てきた人物がきていることがわかってよかったです。(U. K)

博物館の人の話を聞きながら、川越城の広さも少しの時間でわかってよかったです。川越城は自分が思っていたよりも広くて、もし、この勉強をしなかったらわからなかったもので、勉強できてよかったです。今度は、博物館に行ってみたいです。(Y. K)

江戸時代にも狩りをしていたのを知って、びっくりしました。また、私たちの学校の横にある伊草神社から、むかしの絵が見つかったのにもびっくりしました。この絵を描いた人と、川越祭りがどんな様子だったかを描いた人とが、いっしょだったということがわかったことや、108歳まで生きたお坊さんがいたこともわかりました。(F. W)

技術の進歩は目覚ましく、テレビ電話の映像及び音声は予想した以上に鮮明であり、今回のように直接博物館に見学に来ることが難しい学校にも博物館を紹介できる有効な方法となるのではないかと考えています。

企業等ではIT（インフォメーションテクノロジー）に関心が高まりつつある中、博物館においても博物館の持つ情報の有効活用を今後とも積極的に検討していきたいと思っています。

(教育普及係 平岡 健)

蔵造り資料館ホームページ更新

この度、蔵造り資料館ホームページに『社会科の扉』と題し、小・中学校社会科を補助する下記のページを追加しましたので、どうぞ御利用ください。

- 1 「川越の文明開化」(小学校高学年・中学生向き)
- 2 「昔の道具と生活」(小学校中学年向き)

『社会科の扉』へのアクセスは、以下のとおりです。

<http://www.kawagoe.com/kzs/shakaika/>

図 録 紹 介

《博物館受付でお求めいただけます》



川越市立博物館 常設展示図録

一、五〇〇円



第15回企画展 悪疫退散・五穀豊穣
川越の獅子舞

一、一〇〇円



第3回特別展
川越の生んだ鬼才
岩崎勝平

第3回特別展
川越の生んだ鬼才
岩崎勝平
二、五〇〇円

第16回企画展

河越氏と河越館

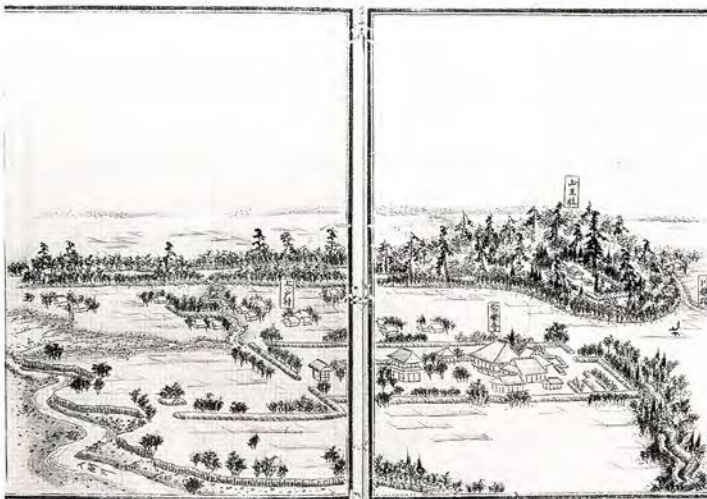
平成12年3月25日(土)～5月7日(日)

特別
展示
室

の
展
観



上戸小学校屋上より河越館跡を望む



常楽寺周辺の図(国立公文書館 内閣文庫蔵「新編武蔵風土記稿」浄書本より)

河越氏は、平安時代末期に川越地方に勢力を張り、14世紀後半、平一揆の乱での滅亡まで繁栄しました。河越氏の館跡は、川越市街の西方約4km、上戸の常楽寺周辺と推定されています。この館跡は昭和59年に「河越館跡」として国指定史跡となり、遺跡の保存が図られてきました。今回の展示は、河越館跡と周辺の遺跡の発掘成果を踏まえ、関連資料を通じてこれまでの河越氏研究を振り返り、今後の研究を展望しようとするものです。

第28号の訂正とお詫びについて
第28号の2頁目『武州高麗郡下小坂村絵図について』の文中、誤りがありました。「平野俊夫氏」は、正しくは「平野俊雄氏」です。ここに訂正し、深くお詫びいたします。

..... 利用の御案内

- ◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)
- ◆休館日 月曜日(休日は除く)、毎月第4金曜日(休日は除く)、休日の翌日(土・日曜日は除く)、年末年始(12/28～1/4)、燻蒸期間(7月上旬頃予定)、特別整理期間(12月中旬予定)

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券 (博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館)
大人	200円(160円)	100円(80円)	100円(80円)	300円
学生・生徒	100円(80円)	50円(40円)	50円(40円)	150円
児童	50円(40円)	30円(20円)	30円(20円)	80円

●() 内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。

●開館時間・休館日は、3館とも同様。(燻蒸期間・特別整理期間は博物館のみ休館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス 「札の辻」下車徒歩8分



発行日 平成12年3月15日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎0492-22-5399